

令和7年度 豆類需給安定会議・ 令和7年度 豆類産地懇談会・ 第71回 豆類生産流通懇談会の開催

(一社)全国豆類振興会 (公財)日本豆類協会

「令和7年度 豆類需給安定会議・令和7年度 豆類産地懇談会・第71回 豆類生産流通懇談会」が、公益社団法人北海道農産基金協会、一般社団法人全国豆類振興会及び北海道豆類振興会の共催により、令和7年9月4日(木)に北海道十勝管内で開催されました。

本懇談会は、豆類の生産・流通・加工等に関係する者が一堂に会し、主産地十勝の作況を調査するとともに、今後の豆類の需給に関する情報・意見の交換を行うもので、日本各地から豆類の生産、研究、流通、輸入、加工、販売等の関係者71名が参加しました。

1. 現地作況調査 9月4日(木)午前

十勝農業試験場及び周辺の生産者の圃場で小豆、金時豆等豆類の生育状況を44名の参加を得て調査しました。

(1) 十勝農業試験場

十勝農業試験場(芽室町)の育種圃場で、試験場の研究者から、小豆については、倒伏もあるが、葉落ちは比較的良好、100粒重は平年並みで、8月の時点ではやや良という評価であること、いんげんについては、今年の天候の影響(6月~7月の高温、少雨)などの影響を受け、粒が小さく、やや不良の見込みであること等の説明を受け、実際の豆の状況を視察しました。



現地作況調査：十勝農試(小豆)



現地作況調査：十勝農試(いんげん)

(2) 生産者（帯広市上帯広町 牧村康弘氏）

牧村氏から、「小豆（きたろまん）については、7月下旬まで40℃近い高温と干ばつの影響で下部と上部には莢がついているが、中間にはない。小粒ぎみで、収穫は、上部の莢がまだ青いので、2週間後の見込み。作柄は平年並み。金時豆については、お盆以降の曇天、土砂降りの影響もあり、色ぼけしてきている。小粒でできはあまりよくない。9月3日に収穫を始めた。手亡については、草丈は高いものの莢ができない」との説明がありました。なお、大豆は葉落ちし始めており、豊作見込みとのことでした。

説明の後、牧村氏の圃場を視察しました。



現地作況調査(牧村氏の説明の様子)



現地作況調査(牧村氏小豆圃場)

2. 令和7年度豆類需給安定会議・令和7年度豆類産地懇談会・
第71回豆類生産流通懇談会 9月4日(木)13:00-16:00
於：ホテル日航ノースランド帯広ノースランドホール

(1) 関係者挨拶

主催者を代表して一般社団法人全国豆類振興会 吉田会長から挨拶があり、続いて、来賓として参加の農林水産省農産局穀物課の山崎課長補佐から、挨拶を兼ねて豆類を巡る現状と課題についての説明と、全国豆類経営改善共励会への生産者の積極的な参加についての要請がありました。

(2) 関係団体からの情報提供

ホクレン農産部松村雑穀課長より、6月以降の平年を上回る高温、6月下旬から7月上旬にかけての干ばつで、6、7月は令和5年を上回る積算温度であったが、8月に入り気温が平年を下回ったことで作況への悪影響は緩和され5年

産ほどではないこと、消費実績については、小豆は昨年比105%で、土産物の回復などが見られていることなどの紹介がありました。

続いて、芽室町農協西谷部長、本別町農協市村部長、女満別町農協浅井部長から、現場での小豆の生育状況について説明がありました。播種日により開花期が高温に当たったところは良くない、着粒数が少なくやや不良、焼け上がりになっているところがある、という報告の一方、着莢数は平年を上回っている、という報告もありました。

次に、十勝農業試験場堀内主査から、最近の天候に鑑み、育種に当たって高温障害への抵抗性を要素に入れていくこと、十勝農試において近年開発された小豆の「きたいろは」について、種子の増殖には品種登録から2~3年かかることから農家での栽培が本格化するまでは、その特長である、胚軸長が長く機械収穫での収穫ロスが少ないことを繰り返し紹介していくことが述べられました。

最後に、日中経済協会北京事務所山田副所長から、「中国の小豆生産の実態」というテーマの発表がありました（発表の内容は本号掲載の別記事を御覧ください。）

(3) 意見交換

全国豆類振興会 藪広報委員長の司会のもと、生産、流通、輸入、加工、販売の代表者から、近年の温暖化傾向での生産、安定供給、国内産を補完する輸入等について意見が交わされました。

主な発言は、以下のとおりです。

<小豆の輸入について>

- 輸入先の状況は以下のとおり。

中国：山田副所長の報告は共同購入以外についてのもの。共同購入しているものは中国の1社と契約し黒竜江省の農園で自社選別している。今年の生産は昨年より良くない見込み。

カナダ：契約生産をしており、10%のバッファをとって生産している。かつてはヘンセル社1社のみであったが、現在は競合数社が参入している状況。作況は今年も順調である。

アルゼンチン：年間3000~5000トンの生産量で、2022年には1400トンの輸入実績があったが、ササゲの混入、白いんげんの残留農薬問題等で

2024年には44トンと急減した。豆の栽培面積が770万haあり、今後、輸入先としての可能性はある。

余談として、先日、豆類協会の調査団としてアルゼンチンを訪問した際、おみやげのどら焼きは好評であったので、インバウンド向けの商品開発が必要ではないか。

<業界の現状、豆類の流通、生産への要望について>

- 乾燥豆の売り先の倒産が増えている。設備投資が進まず、高齢化も進んでいる。資材は価格が上がっているが、なかなか商品に価格転嫁しにくい状況である。希望する数量がお客に流れていない状況もあり、安価な豆の流通を希望。
- 小豆の栽培面積が増えず、(製餡業界としては)供給面に不安がある。25,000haの栽培、100万俵の確保が必要。このためには、きたいろはのような機械収穫適合品種を増やすしかないのではないか。
- 総務省の家計調査によれば、昨年比で1~6月は和菓子の購入3%増となっているが、これは価格上昇により、購入金額が上がっているもの。一方、組合員で売上量が上昇しているところは20%、横ばいが70%、減少が10%であり、総務省統計の傾向と合致している。おいしい和菓子作りのため北海道産小豆の安定供給をお願いしたい。
- 煮豆原料の金時豆等の菜豆は、収穫量が少なく、雨による色流れもある。秋晴れは、秋まき小麦の前作と位置づけられ、面積も増えて収量も多いと聞いていたが、今年は小粒傾向で思ったほど収量が期待できないと感じた。おいしい豆であり、消費者の支持もあるので、秋晴れの本来の力を出してもらうよう期待している。
- 甘納豆の生産量は、横ばいから減少となっており、市場規模もかつて100億円あったのがかなり減少している。組合の会員数も200社から現在30社まで減少。中高年層を中心に一定の需要はあるが、老舗が倒産したり、異業種他社の子会社になったりしている現実がある。今後は、健康食材として訴えていきたいと考えているが、原料の豆と砂糖の価格は高止まりしており、秋晴れに期待しているので頑張ってもらいたい。

<小豆の栽培面積、生産量が増えない理由、その対策について>

- コロナ禍では農家庭先価格が60kg2万円を切った。その後、価格は上がったが、コストも上がり、単収が5俵近くで上がっていない。収入の問題と

機械化等による大きなコスト削減が課題。

- 大豆との比較で収穫作業が大変。大豆は小麦のコンバインで収穫できる。小豆も大型機械で収穫できる品種が普及すれば変わってくるのではないか。
- 恒常的に暑いとなると、9月半ばに収穫できれば秋まき小麦の前作となる。複数年契約で経営の安定ができれば可能となるのではないか。
- 暑さ対策についての研究は、品種以外の取組も行っており、例えば、播種期をずらす、灌水施設があれば灌水するなど。暑熱対策のアイデアはあるので、情報発信をできるだけやっていきたい。

<暑いのであればオホーツク地域が増えるはずとの意見について>

- 秋晴れは成績が良く、面積は3～5割増え、85%歩留まりと品質もよい。小豆については、女満別では契約栽培により面積は横ばい。野良生えなどの技術的問題がある中でがんばっているから横ばいとなっている。最後に、十勝地区農協畑作青果対策委員会 林委員長から、各作物の位置づけを農業者にきちんと伝えていき、温暖化の中で、新たな病虫害に対する新たな防除指針にも対応して取り組んでいきたい、との発言で締められました。



懇談会の様子



会場参加者